

## セネガルの農村——●勝俣 誠

わずか2年足らずのセネガル滞在中で、しかも勤務地が首都ダカールのダカール大学であったため、セネガルの農村についていまだ断片的な印象しか持てない。

ただ、週末や休暇には欠かさず(娘の一人が急性マラリアで寝込んだ期間を除いて)大学の同僚の郷里や知人の紹介してくれた農村部に行くように心がけてみた。おかげで、少々乱暴な言い方だが、北部のセネガル河流域から大西洋沿岸部と内陸の落花生主要生産地帯を経て、南部のカザマンズと南東部まで、一応、二季折々(乾季と雨季)のセネガルの田舎を垣間見る機会を得た。

こうした都会と農村部との往復をとおして、徐々にできあがってきた印象と疑問を四つだけ簡単に報告しておきたい。

まず、はなはだ素朴な発見だが、国土の面積がわずかに約20万平方キロメートル(日本の約半分)、人口約600万人という国でも北部と南部、沿岸部と内陸部とでは、たとえセネガルの農村と一言と言っても、実に気候といい住む人々といい多様である、という人文地理上の発見である。マリの国境部からモーリタニアの国境に沿って流れるセネガル河流域地域は、セネガルで最も雨量の少ない地域で、対岸の地平線からはサハラ砂漠が広がっていく。木々はまばらで、背丈は低く、乾季ともなれば一面砂地の世界となる。河の氾濫を利用し

たソルガムなどの雑穀が伝統農法で作られている。落花生などの換金作物が難しく、歴史的に労働力排出地域で、在フランス・セネガル人出稼ぎ労働者にもこの地域出身が多い。村を訪ねると老人・婦女子しか見当たらないことがある。

南下につれ、やや植生は豊かになり、ダカールを中心として半径約200キロメートルの地帯は、人口の密集する落花生主要栽培地域である。6月の初雨後に播種され10~11月にかけて収穫される見渡す限りに広がる落花生畑と、その単調な景色にいくばくかの変化を与える個性豊かな枝をひろげるバオバブ(*Adansonia digitata*)やアカシア・アルビダなどの樹木が、雨季から乾季にかけてのこの地域の典型的風景である。

さらに、セネガル領に「短刀」のように入り込む旧英領ガンビアを越え南部カザマンズにはいると、緑と沼がひろがる亜熱帯の景色がはじまる。1000ミリメートル近い豊富な雨量にもかかわらず、いまだ人口密度は低く、換金作物栽培も中西部ほど拡大していない。

ではこの一見気候条件に逆らう人口密度の南北変化をどう考えればよいのか。熱帯地理学者グルー(P. Gourou)はその著 *L' Afrique* で、「この分布(南北の人口密度一筆者注)は一瞬理解に苦しむ。なるほど南部では雨はより豊富で、北部の土地はそれほど肥沃でない。つまり歴史、政

治、経済の諸要因こそが北部に人口を集中させ、南部を稀薄にしたのである」と説明する。人文地理がセネガルの歴史に会う一節である。

第2は、農村生活のさまざまな面で見出される「疲れ」である。村の診療所においても備品の薬があったためしはなく、補修されない道路の痛みはとともひどい。話をした農民の多くは、協同組合や村の商人からかなりの額の借金をしていた。とりわけ、近年、落花生の場合、買上げ価格は実質横ばいのまま、肥料などのインプットに対する国の補助金が大幅に削減されてきているため、「労した割には手元に残らない」という生産者の疲れを訴える声は方々にする機会があった。

こうしたなかで、落花生栽培農民には二つの反応があるように見受けられた。一つは、落花生の作付面積を減らし、伝統的穀物であるミレット・ソルガムの作付けを増加し、自家消費用食糧をまず確保しておく反応である。もっともこの自衛策は何も近年始まった現象ではなくて、落花生栽培が19世紀末本格的にセネガルに根づいて以来、落花生相場下落



カザマンズの水田。左の木がアカシアアルビダ

に対する生産者の消極的抵抗行動の一つであった。

もう一つの反応は、公的買上げレートに出荷せず、少しでも高く買上

げてくれる闇ルートに販売を頼ったり、自分で搾油を行なうかもしくは下請けに出し、近隣市場に出す積極的対応策である。伝統的に常にセネガルの公的買上げ価格よりやや高い価格を実施しているガンビアは、闇ルートを運よくぐり抜けた落花生の終着駅である。ガンビア・セネガル国境に通じる幹線道路は、収穫期が始まるや、1メートル位の針金を持ったセネガル税関吏によく出会う。荷積みされた袋に落花生や米がはいっていないか刺して検査するのである。また油脂闇加工の方は、国産食用油の小売り定価が去年の夏150%も引き上げられるや、魅力的な闇市場となっている。

こうしたなかで、政府は、IMF、世界銀行の勧告もあって、生産性向上策としての農民の自主性の拡大策(responsabilisation du paysan)をはかっているが、独立以来、相つぎ実施される農業政策の変遷で、農民には制度疲れともいべき無関心が見出された。

実際、度重なる制度変革にもかかわらず、植民地期末期から1960年代初頭に描写されたセネガル農地の風景が4分の1世紀経た今日見てもその相違を見きわめるのが難しいのは少々不思議な気がした。確かに、『セネガルの農民』という大著を書き上げた地理学者ペリシエ(P. Péliissier)は、「農民の農具がどんなにみずぼらしいものに見えようと、その農具は豊かな経験から生まれた教訓に適っている」と伝統農法の合理性を説くことを忘れない。しかし、独立以来の農村風景の不変性と農民の疲れをこの国の相つぐ開発政策のなかでどう読み込んでいくかという問いは重

要に思えた。

第3は、訪問した農村に大金持が目につかなかったことである。確かに、農村で一際立派なコンクリート造りに住む家がイスラムのマラブー(導師)の家であることを村人からよく教えられたが、この地元の有力者が商業・金融・産業に手を上げ、地



セネガル東部のジャラコト村。落花生播種前の耕作(6月)

域の経済を一変させていくという成功物語は一、二のケース以外に耳にすることがなかった。多くの場合、モスク建設や冠婚葬祭の大番振舞いで蓄積の大半は消えてしまっているようである。アフリカで「資本家は出るが、資本主義が育たない」とよく言われるのを思い出した。むしろ、私の得た農村の社会関係の大まかなイメージとしては、分散した小農と強大な国際援助機関を背にした開発行政の担当者の離合集散関係の方が、行政と農村の間を織りなす商人や実業家の存在より鮮明であった。

第4は、こうした疑問点に何らかの分析の糸口を本来与えてくれるべきセネガル人の手になる最近の研究報告・論文がきわめて少ないことであった。西アフリカの経済・社会に関するアフリカ人自身の見方に接することが筆者のダカール大学選択の理由の一つでもあったが、勤務した法経学部でも研究室をもらったブラック・アフリカ基礎研究所(Institut

fondamental de l'Afrique Noire, IFAN)でも、最近のセネガルの農業に関する数少ない実証研究のほとんどは、フランスを中心とした欧米の研究機関によるものであった。

その理由として筆者が推測するに少なくとも二つあるようである。まずは、財政危機で、統計整備の停滞はもとより、農村調査を実施する予算が不足し外国のスカラシップに頼るか、外国援助プロジェクトにもぐり込むかしない限り、交通費さえも事欠く状況となっていることである。筆者が先週どここの農村に行ってきたというと、大学のアフリカ人の同僚からは「お前は外国人だから運がいい。われわれができないことができる」とよく言われたものである。

もう一つの理由としては、少なくともアフリカ人の開発エコノミストの間では、農村の現況調査は、労多くして将来のキャリアには必ずしも結びつかないという考えがあるように見受けられたことである。現在人気のあるテーマは「工業化と経済統合」「地域協力における銀行の役割」といったものが多く、いわゆる「農村もの」はあまり人気がなく、去年やっと増額した研究予算も大半はパリ行航空券に化けてしまったようである。

こんなわけで、セネガルの農村を専ら経済開発の視角から把えるといっても、判断材料があまりに不足していることに気づく。総じて、旧フランス領西アフリカの社会科学面での研究はわが国ではいまだ非常に少ない。当面、基礎研究の充実が筆者の課題となっている。

(かつまた・まこと/元ダカール大学客員講師・現貿易研修センター助教授)